

形見

形見

「娘が死んだ。悲しさこの上ない出来事だった。私が娘に出会ったのは五年前の雨降る夜、自宅前の電柱でだった。娘は服をびしょ濡れにしてへたりこみ、泣いていた。まだ言葉も話せない年齢の娘は涙声でママ、としきりに叫んでいた。だが娘には母親と会うことが許されていなかった。背中に貼られていた紙には、雨で滲んだ字で『拾って』。たとえ警察に渡しても親のもとには戻らない。もし里親が見つかったとしても、そこでの生活も苦しいという場合だって考えられる。そう思った私は、絶対的な生命保障を与えるべく娘のいる場所へと走っていった。

娘の存在を知られるのはまずかった。近所の人に隠し子がいるなどと勘違いされたら仕事に支障をきたすからだ。したがってまともな教育も受けさせてあげられなかったが、これも娘の命を保障するためだと我慢させざるをえなかった。しかし、娘は突如高熱を発症した。病院に行かせようにも保険がない。それに娘の存在がばれるのは命取りだ。などと考えているうちに、痛い言葉も知らぬまま娘は息を引き取ってしまった。今考えてみると私が彼女を拾ったというのは最悪の運命を辿るということの意味していたのかも知れない。

私が持っている娘の唯一の形見は、彼女の姿を焼き付けた動画一本だった。広い公園での映像だった。たまには運動をさせなければ駄目だろうと思って家からは遠く離れた場所にある公園へとタクシーを使って向かった。そこで娘が見せた笑顔は、映像なんかよりも鮮明に心に焼き付いている。」

「お父さんが死んだ。シンキンコウソクだ、って救急車のおじさんが言った。お父さん先にいなくなっちゃったけど、あたしのこと気づいてないからしょうがないね。それじゃあ、あたしもお父さんについていくね」

やがて部屋に遺族がやってきた。形見の品を整理していると、色々なものが出てきた。離乳食の空き瓶を見つけた男は言った。

「なんだい、あの野郎。隠し子でもいたのか？」

やがてデジタルカメラも出てきた。

「おいおい、なんだいこれは。アイツ、公園で何かを追って撮っているようだけれども...何も映っていないぞ。」

男は、デジタルカメラを段ボール箱に投げ込んだ。女の子がお父さんが逝くのをずっと待っていた隠れ家――。

駆け落ち

俺はただひたすらに走っていた。

文字通り、レールの敷かれた道を歩む、いや、走るのが俺の仕事だ。俺は長距離を走ることを目的として造られた高速鉄道。大陸間横断鉄道っていうのは景色が単調で、走っていてもちっとも楽しくない。夏なんてのはなおさらだ。そんな仕事に飽きがこないのは、いつでも俺の後ろには彼女が付いていたからだ。彼女は一般車両。一般車両ならどれも同じじゃないかと思うやつもいるだろう。だがアイツと俺とは工場以来の付き合いなんだ。俺と彼女とは連結金具以上の固い絆で結ばれていた。

だがこの前の車両交換の時、俺と彼女は離れ離れになってしまった。そして俺の代わりに彼女と一緒にしたのは、俺が前々から気に食わないと思っていた最新型の車両だった。また、俺とアイツとでは運行ダイヤの関係上どうしても会う機会が少なく、したがって彼女と俺とでも会える日がほとんどなくなっていた。

しかし、こんな生活に踏ん切りをつけようと思ったのだ。きっかけは、俺が引っ張っている車両に乗り込んだカップルの会話だった。ふたりはどうやら駆け落ちしたらしかった。その話を聴いていて、感動した。だから目的地のある二人には申し訳ないが、俺は行き先構わない、暴走特急になることにした。

そしてその時は来た。前方に、俺は彼女の姿を認めた。さあ、行くぞ。俺は残りの力を振り絞り、前をゆっくりと走っている彼女へと全速力で突っ込んでいった……。

そして、俺は今初めて、海を見ている。横には彼女の姿もある。俺達を載せた船は揺れながらも航海を続け、やがて俺達を海へと落とした。これで初めて俺達は駆け落ちに成功したのだ。俺が衝突したことで大破し、使い物にならなくなった俺と彼女は、海底へと沈み、人工魚礁となって永遠に一緒なのさ――。

彼は、ある街の裏の占い師だった。まれに来る客に出鱈目の予言をし、料金をふんだくっていた。現に、相手はそれで未来への不安が少し解消されるのだから、詐欺ではないだろう。

ある日、彼のもとに中年の男がやって来た。男は鼻の頭に大きなほくろがあり、髭は剃っていなかった。男に席を勧めた後、占い師は言った。

「あなたには、悩みがありそうですね。話してみてください。」

しばらくして、男は重い口を開いた。

「実は、今、妻ともめていまして……。」

占い師は軽く頷き、続きを促した。

「家族が分裂しそうになっていまして……。」

占い師はそこで話を遮った。

「無理をしてまで話さなくても結構です。なるほど。つまりあなたは、奥様とのよりを戻したい、のですね？」

「……はい。」

占い師は、軽くため息をついた後、優しい口調で言った。

「あなたにはまだチャンスがあります。ただし、それは選択肢付きですね。お話ししましょうか？」

その問いかけに、男は捨て犬のような目つきで占い師を見た後、頷いた。

「選択肢は二つ。一つは、子を捨て、家庭を安定させ、妻とよりを戻す。もう一つは、このまま頑張って家庭を立て直していく。どちらかですよ。」

占い師は、水晶にチラリと目配せをしたあと、男を見た。男の意思は固まっているようだった。

「私は、子を捨てようと思います。」

その答えを出した客を、占い師はしばらく見つめた後、こう言った。

「私にはこれ以上は何もいえません。決断したことを、やり遂げればよいのです。」

こうして、男は料金を払い店を出ていった。

店じまいをした占い師は、携帯である人と通話を始めた。

「ええ。もういいんです。かたはつきましたから。はい。それでは、迎えのほう、よろしくお願ひします。」

占い師は、枯れ葉の散る並木道をゆっくりと歩いていった。その手には、彼が小さい頃撮った写真――鼻の頭に大きなほくろがある父と、財産目当てで父に嫁いだ母と、自分が写った写真――が憎しみとともに握られていた。

形見

<http://p.booklog.jp/book/73024>

著者：重長真

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/greenhilldream/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73024>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73024>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ